

建国の父とナチュラル・ヒストリー

—Thomas Jefferson とサトウカエデとの関わりを中心に—

竹腰 佳誉子¹

Founding Fathers and Natural History:

—Thomas Jefferson and Sugar Maple—

Kayoko TAKEGOSHI

E-mail : kayoko@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード : 建国の父, トマス・ジェファソン, ナチュラル・ヒストリー, 種苗園, サトウカエデ

Keywords : founding fathers, Thomas Jefferson, natural history, nursery, sugar maple

はじめに

建国の父たちをはじめとする独立革命期の政治家,あるいは知識人たちは往々にして農業や植物に対する関心が高かった。その関心の高さは,植物を含むナチュラル・ヒストリーに対する純粋な科学者としての側面と独立後のアメリカという国の将来を見据えた上での政治家としての側面の両方に由来するものであったと考えられる。

独立革命期の政治家たちにとって,ナチュラル・ヒストリーの研究が特別なものであった理由は,それ自体が愛国的な行為だったからである。というのは,それが新世界の産物を説明しているからであった。自然界を探索し,発見し,記述し,名前を付け,分類することは,誕生間もない国家の特徴と未来を定義する手助けとなったのだ(Magee 2)。そしてもうひとつの大きな理由は,建国の父たちの多くが農業や農夫こそが社会のバックボーンである,あるいはそうあるべきだと信じていたことに起因する(Wulf 61)。例えばベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)は,1769年に発表した「検討されるべき立場」(“Positions to be Examined”)と題する論文において農業の経済的,さらには道徳的有益性について次のように語っている。

Finally, there seem to be but three Ways for

a Nation to acquire Wealth. The first is by *War* as the Romans did in plundering their conquered Neighbours. This is *Robbery*. The second by *Commerce* which is generally *Cheating*. The third by *Agriculture* the only *honest Way*; wherein Man receives a real Increase of the Seed thrown into the Ground, in a kind of continual Miracle wrought by the Hand of God in his Favour, as a Reward for his innocent Life, and virtuous Industry¹.

フランクリンはアメリカ独立後の1786年にイギリスの友人に宛てた書簡においても「農業は最も有益な,最も独立した,したがって最も高貴な職業と考える²」と述べており,彼の農業,あるいは農夫こそがアメリカ社会を支える基盤であるという考え方について,北米植民地の独立以前も以降も揺らぎはないものとして見ることができる。

またトマス・ジェファソン(Thomas Jefferson)も『ヴァージニア覚書』(*Notes on the State of Virginia*)において,自身の農本主義思想,選民思想について語っている。

Those who labour in the earth are the chosen people of God, if ever he had a chosen people, whose breasts he has made his peculiar deposit for substantial and genuine virtue. It is the focus in which he keeps alive that sacred fire,

¹ 富山大学人間発達科学部

which otherwise might escape from the face of the earth. Corruption of morals in the mass of cultivators is a phænomenon of which no age nor nation has furnished an example. It is the mark set on those, who not looking up to heaven, to their own soil and industry, as does the husbandman, for their subsistence, depend for it on casualties and caprice of customers. Dependence begets subservience and venality, suffocates the germ of virtue, and prepares fit tools for the designs of ambition. This, the natural progress and consequence of the arts, has sometimes perhaps been retarded by accidental circumstances: but, generally speaking the proportion which the aggregate of the other classes of citizens bears in any state to that of its husbandmen, is the proportion of its unsound to its healthy parts, and is a good enough barometer whereby to measure its degree of corruption. (Jefferson : *Writings* 290-91)

フランクリンと同様に農業は経済的のみならず道徳的にも最も優れた活動であり、またアメリカに繁栄をもたらすものであるという確信が、ジェファソンの植物を含むナチュラル・ヒストリーへの強い関心へと繋がっている。このことは、ジャファソンがヨーロッパに滞在していた時に常にアメリカにおいて繁殖できる植物を探していたことから明白である。ジェファソンが駐フランス公使をしていた際、イタリアからこっそりとポケットに一握りの米粒を忍ばせて密輸したことは有名な話である。アメリカに「移植」(transplantation)され、より繁殖できる可能性は、北米植民地にヨーロッパから移住した人々が、新世界において繁栄していたことから、このことは「アメリカ人」自身がすでに実践し証明していたのだった³。本論では、ジェファソンのナチュラル・ヒストリー、特に植物との関わりと政治との深い関係性について、彼とサトウカエデとの関わりから読み直しを行いたいと思う。

建国の父と植物ツアー

独立革命期のアメリカの政治家たちが国の将来に

関わる議論をする際、彼らの息抜きになっていたのが庭園、種苗園、農園巡り、そしてそこでの庭園主や農夫たちとの会話であった。その目的は会議が行き詰まった時の息抜きだったり、英気を養ったりするだけではなく、植物、園芸、農業に関する最新情報の収集であり、このことは政策に関する議論と同様に国の将来や進路の決定に少なからず影響を及ぼしていた。1787年5月から9月にわたりフィラデルフィア(Philadelphia)で開催された憲法制定会議のときには、参加者の多くの政治家たちがウィリアム・バートラム(William Bartram)の種苗園に足繁く通っていたことは有名な話である。そして1791年のジェファソンとジェームズ・マディソン(James Madison)との北部ツアーもまたフェデラリストのアレクサンダー・ハミルトン(Alexander Hamilton)との議論に辟易して敢行されたものだった。このツアーの目的について、同行者のマディソンは「気晴らしと好奇心」(“Health recreation and curiosity”)であると明確に述べている⁴。建国の父であるジェファソンとハミルトンとの亀裂は、1790年にジェファソンがフランスから戻り、國務長官の職を任命された頃に遡る。一方ハミルトンは財務長官の職を拝命し、アメリカが目指すべき社会は製造業に根差した通商国家であり、農業から工業へと経済政策をシフトさせることが必須であると考えていた。また各州の権限を中央政府に集中させる大きな政府への転換の必要性についても力説していた。先述したようにジェファソンは、独立自営農民による共和主義社会、そして小さな政府を理想としていたことから、ハミルトンの考え方には根本的に反対であり、非常に危機感を抱いていたと想像することは容易である。このようなそれぞれの異なった国家ビジョンに起因するジェファソンとハミルトンとの亀裂に修復の兆しは全く見えなかった。そのような状況下で、ジャファソンはマディソンとともに1791年5月2日に約1ヶ月に及ぶ北部へのツアーに出発したのだった。

この旅行はジェファソン自身のツアーに関するメモ書きから判断すると、ナチュラル・ヒストリーに関する調査ツアーと呼べるものである。メモには日付、訪れた場所、生息する動植物、その大きさなどが記載されていた。例えば、ジョージ湖(Lake George)の驚くほどの美しさ、湖の地形、湖や付近を構成する鉱物、野生ツツジの香り、ストローブマ

ツの森，ドクニンジン，樺の木，蚊，ブヨ，ガラガラヘビ，リス，そしてサラトガ (Saratoga) など革命の史跡が記されていた⁵。これらのメモ書きからはこの旅に関して特段注目すべき点を見つけることはできないし，メモ書き自体，旅の途中である6月3日分までしか記されていないのである。つまり注目すべき対象は，むしろメモ書きに残されていないことにあり，まさに「記録の中の沈黙は，政治が道中議論されなかったことを意味するものではない⁶」ということであろう。

ジャファソンとサトウカエデ

ジェファソンらはメモ書きには記されていない1791年6月4日にバーモント (Vermont) にあるベニントン (Bennington) に到着する。バーモント州は同年3月に14番目の州として合衆国に加盟したばかりであり，ベニントンはサトウカエデの中心地でもあった。ジェファソンが当時サトウカエデが経済的にも政治的にも非常に価値があると信じていたことを考慮すると (Wulf 94)，ベニントン訪問の目的のひとつがサトウカエデに関する情報収集であったことは間違いない。ジェファソンにとってハミルトンが商業を通じて，かつての敵であるイギリスとのさらなる関係強化を目論んでいることへの対抗措置の鍵を握るのがまさにサトウカエデだったと考えられる。というのも当時アメリカは砂糖をイギリス領西インド諸島のサトウキビに頼っており，サトウカエデの存在は西インド諸島のサトウキビの依存からの脱却の可能性を暗示していた。サトウカエデは，サトウキビ栽培のような大規模プランテーション，つまり奴隷も必要なく，ジェファソンが目指す小さな農夫のビジョンとも合致していた。ジェファソンが何百人もの奴隷を所有していた大農園主だったことは周知の事実であり，彼がサトウキビ栽培と奴隷問題に関して本当に深く憂慮していたとは考えにくく，また自身の奴隷であったサリー・ヘミングス (Sally Hemings) との愛人関係などの事実を考慮すると，彼のサトウカエデへの関心はあくまでもイギリスからの砂糖の輸入依存からの脱却が大きな理由だったと考えられる。

ジェファソンのサトウカエデに対する大きな関心は，少なくともこの北部ツアーの約1年前にイギリスの友人へ宛てた書簡に既に明確に記されている。

書簡の中でジャファソンは次のように述べている。

Though large countries within our Union are covered with the Sugar maple as heavily as can be conceived, and that this tree yeilds a sugar equal to the best from the cane, yeilds it in great quantity, with no other labor than what the women and girls can bestow, who attend to the drawing off and boiling the liquor, and the trees when skilfully tapped will last a great number of years, yet the ease with which we had formerly got cane sugar, had prevented our attending to this resource. Late difficulties in the sugar trade have excited attention to our sugar trees, and it seems fully believed by judicious persons, that we can not only supply our own demand, but make for exportation. I will send you a sample of it if I can find a conveyance without passing it through the expensive one of the post. What a blessing to substitute a sugar which requires only the labour of children, for that which it is said renders the slavery of the blacks necessary⁷.

ジェファソンは合衆国には既にたくさんのサトウカエデの木があり，その木からサトウキビと同じくらい良質の砂糖を収穫することができることや，その収穫量は国内で消費する分だけではなく，輸出できる見込みがあること，そしてサトウキビ栽培をするための大規模プランテーションから黒人奴隷を必要としないサトウカエデの栽培に置き換えることがいかに素晴らしいかを訴えている。ジャファソンのこれらの言葉の裏にあるのが，アメリカがもはやイギリス領西インド諸島のサトウキビによる砂糖に依存することはないというイギリスに対する警告である。アメリカは植民地時代から，イギリスによる航海法，糖蜜法，そして砂糖法に長らく苦しめられてきた。とりわけ1764年に制定された砂糖法により植民地がかなり厳しい立場にたたされ，このことが独立革命に少なからず影響を及ぼしたのは想像に難くない。

ジェファソンがサトウカエデにある種アメリカの未来を託していたように思われるのは，ベンジャミン・ラッシュ (Benjamin Rush) がアメリカ哲学協会 (American Philosophical Society, 以降 APS)

の会報に発表した論文からも推察できる。ラッシュの論文は1793年発行のAPSの会報第3号に発表されているが、ジェファソンがラッシュにサトウカエデの情報についての執筆を依頼したのは、マディソンとの北部ツアーに出かける数日前のことである。ラッシュの論文は、ジェファソンの依頼に対する回答として書かれたものであり、書簡形式の論文の日付は1791年8月19日となっており、この論文は同日ジェファソンも同席したAPSの会議で披露されている(Henry 195)。ラッシュは論文において、サトウカエデの樹液からどのくらいの砂糖をとることができるか、フィラデルフィアのノーサンプトン(Northampton)でサトウカエデを栽培している農夫の実例、樹液の取り方、樹液を砂糖に変える方法、イギリス領西インド諸島のサトウキビから取れる砂糖との質的、量的比較、およびそれぞれの労働量の比較、サトウカエデの様々な利用法などについて述べている。加えてサトウカエデの栽培には奴隷の労働力を一切必要としないことから、メープルシュガーを「イノセント」(“innocent”)であると称してその利点を特に強調したのだった⁸。

バーモントツアーの目的

このようなアメリカの未来を握るサトウカエデの街であるベニントンでジェファソンらを迎えてくれたのが、いずれも反フェデラリストの知事で、のちに上院議員を務めることになるモーゼス・ロビンソン(Moses Robinson)、州務長官だったジョセフ・フェイ(Joseph Fay)、さらに『バーモント・ガゼット』(*Vermont Gazette*)の発行者であるアンソニー・ハスウェル(Anthony Haswell)だった。彼らに庭園等を案内してもらい、ジェファソンらは様々なバーモント特有の植物を興味深く観察する。このことについては、1791年6月5日付のジェファソンからトーマス・マン・ランドルフ(Thomas Mann Randolph)宛の書簡に記されている。そこでも最初に取り上げられている植物が「有り余るほどのサトウカエデ」(“the Sugar maple in vast abundance”)であり、ジェファソンはバーモントで出会った様々な植物に対し、大変満足したと述べている⁹。このツアーに満足したのは、ジェファソンらだけではなく、彼らの愛国心を代弁してくれる果樹園-サトウカエデ-への熱狂は、すぐさま伝播

していった。ハスウェルは、自身の新聞に次のような記事を掲載している。

It is reported from good authority, that accurate calculations have been made, by which it is ascertained beyond a doubt, that there are maple trees in the inhabited parts of the united states, more than sufficient, with careful attention, to produce sugar adequate to the consumption of its inhabitants...attention to our sugar orchards is essentially necessary to secure the independence of our country.¹⁰ (underline added)

ハスウェルの最後の言葉は、先述したジェファソンが1年前にイギリスの友人に宛てた書簡における宣言、つまりイギリスへの警告をそのまま繰り返したものに過ぎない。しかしながら1年後のハスウェルの文章は、サトウカエデの栽培についてより具体的で現実的になっていると言えよう。つまり砂糖に関してはイギリス依存からの脱却をはかるために心構えをしっかりと持つべきであるというアメリカ人への警告へと変化しているように見える。ハスウェル、あるいはハスウェルを通じて訴えているとも考えられるジェファソンは、アメリカ国民、とりわけバーモントの人々にサトウカエデ栽培に細心の注意を払って、国内需要を満たすに十分足る量のサトウカエデを生産する必要があること、このことを絶対やり遂げなければならないことを警告しているのだ。そしてジェファソン自身が彼らの模範となるべく、ベニントンでサトウカエデの種を注文し、ヴァージニアにある自身の果樹園のあるモンティセロ(Monticello)で栽培する決意を示している。種を注文されたフェイは、春には自身の果樹園でいつも通りサトウカエデを栽培すること、バーモントの他の人々にも積極的に栽培を勧めることを約束したのだった。そして、ジェファソンのサトウカエデ栽培の対する強い執着心はこのツアーの最終訪問地でも明らかにされることになる。

ジェファソンとマディソンは、ニューヨーク州のフラッシング(Flushing)にあるウィリアム・プリンス(William Prince)の種苗園を訪問する。ニューヨークが一時的に首都であった際、既に多くの政治家たちがこの種苗園を訪問しており、マディソンも

例外ではなかった。一方初めての訪問となるジェファソンはプリンスにここにある全てのサトウカエデが欲しいと告げたのだった。プリンスの種苗園で見ることができるピンと立っているサトウカエデの若木の列は、ジェファソンにとって経済的自立のために闘うアメリカのシンボル、言うなればイギリスに挑戦するシンボルのようなものだったと考えられる (Wulf 97)。ジェファソンはイギリスへの砂糖の依存をできるだけ早く減らしたいという強い思いから、バーモント、あるいはニューヨークで大量のサトウカエデを購入、注文している。ハミルトンの重商主義に対する対抗手段として、当時のアメリカ全土においてサトウカエデ栽培を推進しようとするジェファソンの真摯な思いとは裏腹に、サトウカエデ栽培がアメリカでは不向きであることが判明する。ジェファソンの果樹園のあるモンティセロも例外ではなく、ヴァージニアの天候がサトウの収穫を妨げる結果となっていた。それにもかかわらず、ジェファソンはサトウカエデの種を注文し続けたのだった。彼にとっては、サトウカエデの存在はここであっさりで見限ってしまうには、あまりにも多くの希望を担っていたのだ (Wulf 97)。

北部ツアーの本当の目的

ジェファソンとマディソンのツアーに関する彼ら自身のメモには政治的 목적は一切記されていない。このことは、先述したマディソンがその目的について「気晴らしと好奇心」と述べた通りであり、このツアーが植物探索ツアーであることはジェファソンのツアーに関するメモ書きからも疑いの余地はない。しかしながら、フェデラリストの代表であり、急先鋒であるハミルトンとの対立に端を発しているこの植物ツアーは、ジェファソンの政治的主張をバックアップするという目的が少なからずあったと見るべきではないだろうか。それがバーモントで見学したサトウカエデであり、反フェデラリストの政治家たちとの面談に繋がっていると考えられる。既に述べたようにジェファソンのツアーに関するメモ書きは、6月3日が最後になっており、肝心のバーモントでのことや最終訪問地であるフラッシングでのことは一切触れられてはいない。メモ書きにおけるこれらの省略がどのような意味、あるいは意図を持つものなのかを断言することはできないが、このツアーに

おいてサトウカエデがジェファソンにとって他の何よりも興味深い植物であったことは間違いないだろう。その理由は既述した通り、サトウカエデがアメリカの未来を担う重要な植物であり、それは経済的にも政治的にも両方の意味において特別な存在であったということである。してみれば、ジェファソンにとって「植物／ナチュラル・ヒストリー」と政治はコインの裏表のようにあまりにも密接に結びついており、このツアーの目的も植物探索ツアーといながら、それは政治ツアーでもあったといえる。ジェファソンがハミルトンとの政治的争いに辟易して出かけたツアーであるが、サトウカエデを目にした途端にハミルトンへの対抗手段としての存在を確信し、並々ならぬ自信が溢れてきたはずである。

そしてジェファソンはバーモントの政治家、そして植物に関わる人々との交流を通じて、確かにサトウカエデをはじめとするアメリカの将来に役立つ植物に関する知識を深めていたが、同時にハミルトンに反旗を翻すことが可能かどうか、その動向をさりげなく探っていたとも考えられるだろう。彼らは自分たち反フェデラリストがフェデラリストに対抗できる組織となることができるかどうか、つまり（民主）共和党の設立とその未来について考えていたのである。おそらくこの点についても、ジェファソンは自信を深めている。バーモントで会ったロビンソンらはその後熱狂的な共和党員となり、生涯ジェファソンを支えてくれることになったし、共にツアーに出かけたマディソンとの友情関係はより一層強固なものとなっている。マディソンが（民主）共和党をジェファソンと共に立ち上げ、政権をフェデラリストから奪取し、ジェファソンが大統領になった際には國務長官としてジェファソンを支えてくれたのが何よりの証拠である。

植物ツアーに出かけた同年の秋には共和党はフェデラリスト党の新聞である『合衆国ガゼット』 (*Gazette of the United States*) に対抗すべく共和党新聞『ナショナル・ガゼット』 (*National Gazette*) を発行し、いよいよ共和党への支持を集めるべく党の政策をアメリカ全土へと広めていった。新聞の発行人であるフィリップ・フレノー (Philip Freneau) は、共和党新聞の発行を一旦断ったことについて次のように語っている。

So many difficulties occurred in regard to my removing from this city to Philadelphia and personally establishing the paper, the hint of which you, Sir, in conjunction with Mr. Madison were pleased to mention to me in May last, that I had determined in my own mind not to attempt it¹¹. (underline added)

ここで注目すべき点は、ジェファソンとマディソンがこの植物ツアーの真っ最中に共和党新聞発行についての話をしているということである。このことからツアーの道中、二人はフェデラリストに対してのあらゆる対抗策を協議していたことが推察される。してみれば、このツアーは共和党結成の始まりのような非常に重要な役割を果たしていたと言えるだろうし、バーモントでのロビンソンらとの対面は今後の大統領選を見据えたまさにロビー活動として捉えることもできるのである。

まとめ

独立革命期の政治家たちにとって、ナチュラル・ヒストリーの研究が特別なものであった理由は、それ自体が愛国的な行為であったことに加え、これまで見てきたようにナチュラル・ヒストリーの研究がアメリカの政治的及び経済的の未来の発展に我々が想像する以上に当時は大きく関与していたことにある。

かつてヨーロッパで流布していた「アメリカ退化説」を論駁するためにマンモス探しに躍起になっていたジェファソンにとって¹²、やはりナチュラル・ヒストリー研究の一環として認識されるサトウカエデを含む植物観察ツアーは、政治的論争からの一時的な逃避行をかなえてくれただけではなく、アメリカの経済的、そして政治的な変化、さらに重要なことは新しい政治的局面的確約につながるものであったと言える。独立革命期における政治家たちのナチュラル・ヒストリーに対する関心は、常にアメリカの未来を左右する一翼を担っており、その影響を見過ごすことは決してできないのである。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K00386 の助成を受けたものです。

注

1. Benjamin Franklin, "Positions to be Examined," April 4, 1769, in *The Papers of Benjamin Franklin*.
<https://franklinpapers.org/framedVolumes.jsp>.
2. Benjamin Franklin, "To Jonathan Shipley," February 24, 1786, in *The Papers of Benjamin Franklin*.
<https://franklinpapers.org/framedVolumes.jsp>.
3. クレヴクール (J. Hector St. John de Crèvecoeur) は、『アメリカの農夫からの手紙』(*Letters from an American Farmer*, 1782) の中で、「移民」という意味を「移植」として植物に例えて呼んでいる。
4. James Madison, "James Madison to Thomas Jefferson," 12 May, 1791. *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 295–295.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0076-0005>.
5. Thomas Jefferson, "Jefferson's Journal of the Tour, [21 May-10 June]." *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 453–456.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0002>.
6. "Editorial Note: The Northern Journey of Jefferson and Madison," *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 434–453.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0001>.
7. Thomas Jefferson, "From Thomas Jefferson to Benjamin Vaughan," June 27, 1790. Founders Online.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-16-02-0342>.
8. Benjamin Rush. "An Account of the Sugar Maple-Tree of the United States, and of the Methods of Obtaining Sugar from It, together with Observations upon the Advantages Both

- Public and Private of This Sugar. In a Letter to Thomas Jefferson, Esq. Secretary of State to the United States, and One of Vice Presidents of the American Philosophical Society,” *Transactions of the American Philosophical Society*, 1793, Vol. 3 (1793), pp. 64-81.
https://www.jstor.org/stable/1004853?seq=1#metadata_info_tab_contents.
9. Thomas Jefferson, “From Thomas Jefferson to Thomas Mann Randolph, JR.,” June 5, 1791. *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 464–466.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0007>.
10. “Editorial Note: The Northern Journey of Jefferson and Madison,” *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 434–453.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0001>.
11. Philip Freneau, “Philip Freneau to Thomas Jefferson,” August 4, 1791. *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, p.754.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0374-0002>.
12. ジェファソンのマンモス探しと「アメリカ退化説」に関しては、竹腰「アメリカ哲学協会とアメリカン・アイデンティティの誕生」（2019）を参照のこと。
- Public and Private of This Sugar. In a Letter to Thomas Jefferson, Esq. Secretary of State to the United States, and One of Vice Presidents of the American Philosophical Society,” *Transactions of the American Philosophical Society*, 1793, Vol. 3 (1793), pp. 64-81.
https://www.jstor.org/stable/1004853?seq=1#metadata_info_tab_contents.
- . “To Jonathan Shipley,” February 24, 1786, in *The Papers of Benjamin Franklin*.
<https://franklinpapers.org/framedVolumes.jsp>.
 Accessed 1 October 2020.
- Jefferson, Thomas. *Thomas Jefferson: Writings*. Edited by Merrill D. Peterson, Library of America, 1984.
- . “From Thomas Jefferson to Benjamin Vaughan,” June 27, 1790. Founders Online.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-16-02-0342>. Accessed 1 October 2020.
- . “Jefferson’s Journal of the Tour, [21 May-10 June].” *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 453–456.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0002>. Accessed 1 October 2020.
- . “From Thomas Jefferson to Thomas Mann Randolph, JR.,” June 5, 1791. *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 464–466.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0007>. Accessed 1 October 2020.
- Madison, James. “James Madison to Thomas Jefferson,” 12 May, 1791. *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 295–295.
<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0076-0005>. Accessed 1 October 2020.
- Magee, Judith. *The Art and Science of William Bartram*. The Pennsylvania University Press, 2007.
- Philips Jr., Henry. *Early Proceedings of the American Philosophical Society for the Promoting of Useful Knowledge: Compiled by one of the secretaries: from 1774 to 1838*. Press of McCalla & Stavely, 1884.
- Rush, Benjamin. “An Account of the Sugar Maple-Tree of the United States, and of the Methods of Obtaining Sugar from It, together with

引用文献

- Crèvecoeur, J. Hector St. John de. *Letters from an American Farmer and Sketches of Eighteenth-Century America*, edited by Albert E. Stone. Penguin Books, 1986.
- Franklin, Benjamin. “Positions to be Examined,” April 4, 1769, in *The Papers of Benjamin Franklin*.
<https://franklinpapers.org/framedVolumes.jsp>.

Observations upon the Advantages Both Public and Private of This Sugar. In a Letter to Thomas Jefferson, Esq. Secretary of State to the United States, and One of Vice Presidents of the American Philosophical Society,” *Transactions of the American Philosophical Society*, 1793, Vol. 3 (1793), pp. 64-81.

https://www.jstor.org/stable/1004853?seq=1#metadata_info_tab_contents. Accessed 1 October 2020.

Wulf, Andrea. *Founding Gardeners: The Revolutionary Generation, and the Shaping of the American Nation*. Vintage Books, 2012.

“Editorial Note: The Northern Journey of Jefferson and Madison,” *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 20, 1 April–4 August 1791, ed. Julian P. Boyd. Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 434–453.

<https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-20-02-0173-0001>. Accessed 1 October 2020.

竹腰佳誉子. 「アメリカ哲学協会とアメリカン・アイデンティティの誕生—金星とマンモスを追いかけて」『繋がりの詩学 近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』 彩流社, 2019.

(2020年10月20日受付)

(2020年12月8日受理)